

## V. J. ベニット

### ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割(Ⅳ)

内 尾 一 美  
渡 辺 信 生 訳

#### ナルチス と ゴルトムント

中世のある時期、「マウルブロン神学校」の内側と周辺を舞台にして、ナルチスとゴルトムントという二人の若者が出会い、磁石に引き寄せられるように互いに引きつけられる。ナルチスは、ゴルトムントが修道士の生活に理想的に適しているのではないということ、また彼の修道誓願を誓う義務を負いたいという願いは、完全には本物でないということに気づいて、指導者と教師の立場をとるよう促されているのを感じる。こうしてゴルトムントに自分の本当の性質を気づかせることが、ナルチスの自ら課した義務になる。

修道院から近くの村に抜けだす禁じられた遠出の一つに参加しようという誘惑に負けて、ゴルトムントは若い娘たちの一人から初めてのキスを体験する。この体験全体が数多くの葛藤の最初のもの口火をきることになる。しかしこの場合、彼は自らの人生肯定の衝動と、修道僧になりたいという人生否定の熱望との和解を試みなければならない。

ナルチスはふさわしくも教師の役割を引き受ける。そしてその無意識のどこか深い所に愛する母の記憶がひそんでいて、この母の意識したイメージを、父親が抑圧し破壊することに成功したのだということを、彼の友人が認識するのを助けようと努める。彼の母親の暖かい官能的な性質は、極めて異質で、うんざりさせるような、完全に受け入れ難いものであったので、父親はその結果として彼女に愛と理解を家庭の外で見いだすように強いた。母を失ったことは、彼の性質の官能的な側面を失うことに等しかった。ゴルトムントはナルチスによって、自分が母の領域、即ち、自然な官能的な領域の方に、より一層近親関係があるということを受容させられてからは、父の領域を逃げ出して、衝動と情熱に奔放に反応することによって、進むべき道を見いだすことが本質的に自由気ままにできるので

ある。ナルチスは、彼自身の神への献身に与えるかも知れないゴルトムント出立の影響について多少懸念している。しかし一方では、自己の運命を捜し出すのが各個人の義務なのだということを自覚している。

この新しい冒険に乗り出す直前に、ゴルトムントはリーゼから誘惑される。それで自分は禁欲生活に適してはいないという事実が、彼の心に裏づけられる。この乱婚のパターンは極めて多様な状況の下で、何度も相手を変えて何回も繰り返されることになる。女たちは彼には全く抵抗できないと思う。美しい女もそうでない女も、一様に彼の暖かさと優しい態度に引きつけられる。ユーリエとリディアという、ゴルトムントが数週間を共に過す裕福な貴族の娘たちは、原則に対する僅かな例外にすぎない。ゴルトムントが殆んど決定的な関係をかち取るのは、リディアとの関係においてであるが、彼の官能的なアプローチが、この愛らしい感じやすい女性を征服するあらゆる希望を打ち砕く。父親は二人の娘がゴルトムントとベッドの中でたわむれているのを知ると、彼を領地の境まで連れて行って、二度と再び領地に足を踏み入れたら命はないと言って脅かす。

けれどもゴルトムントにとって最高の体験は、彼をとっても魅力的だと思う多くの女たちの一人に抱かれているときに起るのではなく、良心から恥辱と悔恨の想いを取り除こうとする彼の稀な試みのひとつの間に起るのである。礼拝堂の中で彼は聖母マリア像の前にひざまづく。そのとき受ける印象によって心底深く感動させられる。彼はこの神々しいマリア像を刻んだ親方を見つけだし、必要な技巧を習得し、自分自身の印象から崇高な芸術作品を創造しようと誓う。心の中に感じているイメージに形を与えたいという抗し難い願望にかりたてられて、彼は芸術家ニクラウス親方を探しだして弟子になる。この親方の専門的な技術の指導を受けて、ゴルトムントの潜在していた才能が一年以内に開花して、彼はすばらしい芸術作品を彫刻する。愛される人ヨハネを表現しているゴルトムントの彫像は、ナルチスにそっくりである。この作品のおかげで、彼はニクラウス親方の承認ばかりでなく、芸術家たちのギルドの承認をも獲得するのである。親方との協力の申し出と、彼の美人の娘との結婚の話は言うまでもない。

裕福な芸術家の秩序のある安全な、しかし世俗的な生活と、浮浪者ののんびりした無責任な生活と、どちらの生活をたどるかを決定するのに彼はほとんどためられない。彼は今や荒れ狂う黒死病によって荒廃した田舎を、至る所あてもなく放浪する生活に戻る。至る所で猛威をふるっている死の数々の顔に魅惑され、興味をそそられて、彼はこうした無数の死のイメージを注意深く心に留める。恐ろしい死の苦痛と苦悶から、抱擁し合う恋人たちの恍惚の言葉に至るまでの全スベ

クトルを横切りながら——彼はのちに人間の情熱の無数の相を表現するのに利用するであろう。このようにありとあらゆる恐怖と絶望に取り囲まれながらも、ゴルトムントが起り得る結果を顧みず、ペストのために死ぬ運命にあるレーネと至福の数週間を過すとき、人間関係の美しさが花開く。

レーネの死によってすべての義務——道徳その他——から解放されて、ゴルトムントは生涯のこの時期に得たさまざまな印象を表現したいと切望する。これらのイメージを再現するために、親方が仕事場を使わせてくれるだろうと考えて、ニクラウス親方の仕事場に戻ってくると、親方がこの恐いペストの犠牲になっており、娘もはや以前のような目を見張らせる美人ではないのを見いだして彼は悲しむ。親方の娘リースベートは彼の徒弟時代よりもずっとよそよそしくなっており、彼や世間一般に対して苦々しい気持になっていて、彼を旅立たせてしまう。心の中に絶えず作り上げてきたイメージを最終的に創造しようとする、やむにやまれぬ力に駆り立てられて、彼は以前の下宿の主人のもとに身を寄せる。そしてリースベート、レーネ、ニクラウス親方、マルグリット、レベッカ、更に彼が放浪の間に出会った多くの死者たちのような人物像を、記憶をもとにしてスケッチする際限のない時間を開始する。だがゴルトムントがいかにも心の中の無数のイメージから、母エーヴァを創造しようという試みにとりつかれていても、国務大臣の愛人、美しく誇り高いアグネスの魅力に抵抗することはできない。彼にとって彼女は美の集約であり、彼女を征服のリストに加えることは、彼の夢の完成を実現する際の芸術家の深みと認識を増すことになるであろう。彼は実際アグネスの好意をかち得て、彼女の魅力を味わうためにあらゆる機会を利用する。不運にも大臣がかなり親密な状況にある二人の現場に不意に現われ、その結果ゴルトムントに絞首刑を宣告する。甘んじて死ぬことができず、彼は最後の懺悔を聞きにくる僧侶を殺し、その服を着て逃げようと決心する。けれども彼の告白を聞きにくる僧侶は、ナルチスであることが判明する。ナルチスは現在の地位であることのできるある種の譲歩と引き換えに、ゴルトムントを自由することに成功したのである。

ゴルトムントは、自分の人生に及ぼしたナルチスや神学校、その他の人々の影響に何としてでも報いるために、礼拝堂の祭壇と他の芸術的装飾のためのすばらしい彫刻をすることで、それからの数年を過す。けれどもこうした芸術への熱烈な献身も、彼の無意識の中から理想の像、即ち、母エーヴァの姿を解き放つのに不十分である。

ゴルトムントは、芸術的な努力の純化によって根元的な衝動を抑えることがで

きず、またそうしたいとも思わず、新たな征服から新鮮なインスピレーションを得る必要を主張して、再びナルチスに別れを告げる。ゴルトムントは失望に終わる運命にある。なぜならアグネスはほとんど彼に気づかないし、またもっと若いゴルトムントの愛撫であったなら、たやすく屈服したかも知れないある若い娘も、この愚かな老人を鼻であしらうからである。マリアブロンを去って間もなくかかった重い病気にも拘らず、また彼の不運にも拘らず、彼は修道院に戻るのを余儀なくされるまで地方を放浪する。彼はナルチスに歓迎され、彼の看護をして健康を回復させるためにあらゆる試みがなされる。——しかし無駄である。

芸術によって最高の体験を実現することができなくて、ゴルトムントは今や喜びにみちて原始の母とのあの合体を予感する。だがこのたびは死を通じてなのである。彼は官能の喜びによっては目的を達成することができなかったし、殺人の情熱も、死の悪疫もなんら真の助けにはならなかった。一つ一つの体験は、あのような夢の形成に疑いもなく意味深く貢献したのであるが、まことに決して実現することはなかった。

ゴルトムントは舞台から姿を消す。そしてナルチスは、彼らの友情と愛が果てしない価値を持ったものであったのを知りつつ生き続ける。第二の自我である官能的なものが、理性的な自我である思索家、禁欲主義に置き換えられたのである。

恐らく「シッダールタ」を例外として、ヘッセがこれほどはっきりと精神と自然の領域を描写した小説は他にはあるまい。これら二つの対極は、常にどちらか一方の形で存在し、空間的且つ外面的な対極化（シッダールタ）において反映されるか、またシンクレアやクラインやハラールの場合のように、一つの極から他の極への動揺の中に反映されるかした。上述の主人公たちの場合には、その主人公特有のある面、気分、態度に共感することがより問題であったのに対して、「ナルチスとゴルトムント」においては、人はどちらかの人物に共感を覚えるのである<sup>(155)</sup>。

ナルチスは精神の領域内、つまり彼自身の内部で活動する、むしろ内向的な人物である。ところがゴルトムントは、明らかに外向的な人間であって、ひろびろとした戸外にいるときか、人生の創造的過程に深くかかわっているときの方が気楽なのである。ナルチスが父の原理を体現し、知的で精神的なものに傾斜しているのに対して、ゴルトムントは「始源の母」ばかりでなく、彼自身の母を捜し求めることによって、母の原理を体現している。ナルチスは明確で具体的な術語を用いて概念化する。ゴルトムントは空想にふけり、幻影を見、夢を見る。ゴルトムントは言葉をほとんど必要としない領域の中で行動する。彼の概念は名人のさ

まざまなタッチである。ナルチスは対極化し、区別し、類別することで成功する。ゴルトムントはそのような鋭い表現の全領域を抹殺することに専念する<sup>156</sup>。

二人の兄弟の間に、明らかにごく僅かな和解さえ達成されなかった「王様の祭」における明白な敵意と対照的に、ナルチスとゴルトムントは、いかなる真の敵対関係もない、より融和的な性質を決定的に示している。彼らは互いに強く引きつけられている。そしてどどちらか一方を排除しようと試みる代りに、彼らを互いに補足し合う役割で示そうとする試みが、著者によってなされている。クルト・レーゼは、精神的な要素と官能的な要素との相互的な引力があるように思われると述べている。

「けれども心と精神とは、彼らのうちに二分された形で現われてはいない。心と精神とは互いに関与している。しかし一方においては精神が心より優勢であり、他方においては心が精神より優勢である。こうしてナルチスは大いなる『父』に従い、ゴルトムントは大いなる『母』に従う。父の世界の住人の故郷は観念である。彼らの危険は真空の中で窒息することである。母の世界の住人の故郷は大地である。彼らの危険は感覚の世界の中で溺死することである。」<sup>157</sup>

互いに補足し合うことにおいてさえ、ナルチスとゴルトムントが生き続けるためには、一定量の自律性が必要である。それぞれ自己の内部の法則を認識し、それに従って行動しなければならぬ。ゴルトムントをその真の性質へ目ざめさせるのはナルチスである。

「……………君が半分眠っていたり、時には完全に眠っているのに、私はさめている。知性と意識を持って自分自身や心の奥底の非理性的な力、衝動、弱さなどを知り、それらを考えに入れることのできる人を、私はさめている人と言うのだ。……………君は幼年時代を忘れてしまった。その幼年時代が、君の心の奥底から君を求めている。それは君を悩ますことだろう。君がそれを聞き入れるまでは。……………君たちの素性は母性的なものだ。君たちは溢れるばかりの世界に生きている。君たちには愛の力と体験し得る力が与えられている。充実した生命、果汁、愛の花園、芸術の美しい国は君たちのものだ。」<sup>158</sup>

ゴルトムントが長い間抑圧してきた母の姿を、自分の無意識の中から取り戻すことが、最も重要なことなのである。この新しい崇拜の対象を救出することによってのみ、彼は自らの真の自我をはるかに深く認識し、自己実現に至る正しい道に乗りだすことができるのである。いくつかの夢の中で彼の母親の領域のより深い意味が、次第に意識の領域に戻ってくる。

「長い間見捨てられていた母が、再び彼の所へやってきたのであった。……………」

そこでは母の世界が彼の周囲に香気を漂わせ、不可解な愛の眼から黒々とのぞき、海や天国のように深くざわめき、無意味なというよりむしろ意味に溢れた愛撫の言葉をやさしくつぶやき、甘い味と辛い味を感じさせ、乾いた唇と目を絹のような髪でなでた。母の中には、やさしいものがすべてあったばかりでなく、甘い青い愛のまなざしばかりでなく、幸福を約束するやさしい微笑、可愛がる慰めなどがあった。母の中には、どこか優美なヴェールの下に、すべての恐ろしいものと暗いもの、すべての欲望、すべての不安、すべての罪、すべての苦しみ、すべての誕生、すべての死の必然があった。」<sup>159</sup>

ゴルトムントの母の記憶がゆっくりと戻ってき、特にあの幼年時代の記憶が一層強められる。母親と幼年時代に関するこの意外な事実は、ラング博士によるヘッセの治療を思いだせるということがほめかされてきた。F.J.アンジェロは、ほかならぬこの治療について特に次のように言及している。

「……………彼は再び永遠な母なる女性に出会って、彼女を愛する子供にさせられてしまった。ゴルトムントの心に彼女は治癒する危機を呼び起す。なぜなら彼の母は、彼の父を捨てて魔女の呼び声に従った異教徒の出の美しい踊り子だったのだから。ナルチスは名前を呼んでデーモンを呼び出して言った。私の友は母を忘れてしまっていました。今では彼は自分の人生を、母を求めることに用いるべきだということを知っています。彼は絵を画く能力を持っているので、母の絵を書くために自分の芸術を用いるべきです。」<sup>160</sup>

自分の本質について高まったゴルトムントの認識は、自由の増加を伴う。彼のナルチスの指導への依存は減少する。そして彼は今や「外部」の大いなる女性、即ち、母なる自然を親しく知る必要を切実に感じる。禁欲生活との絶縁は、ひとたび出て行こうと決意するや否や、かなり急速に果たされる。彼が修道院を去ろうと決心する決定的な要因の一つは、知的な勤めの間にも依然として消えることのない苦労とは対照的な、彼が自然に対して抱いている深い親近感である。

いつものように藁草を捜しに陽光の降り注ぐ田舎に遠出したとき、ゴルトムントは暖かい日射しを浴びて眠りに落ちる。目をさますと、自分の頭が女の膝の上に乗っているのでいくらかびっくりする。まだ全然知らない人間同士なのに、彼女はとても情熱的なキスをして彼に挨拶するので、彼もすぐ同じ挨拶の仕方でお返事。「その女の口は彼の唇にふれたままだった。……………しまいには彼の唇を力づくで激しく襲い、彼の血を襲ってその奥底まで目ざめさせた。」<sup>161</sup>

彼女の辛抱強い指導を受けて、彼は情事のさ中に最初の法悦を体験する。フリードリヒ・クラインと宿屋の主人の妻の場合がそうだったのだが、ほとんど自責の

念がない。ゴルトムントによってヘッセは、クライン、シンクレア、ペーター・カーメンチント、その他の主人公たちによってなしたものよりも、はるかに程度の高い無意識からの投影との統合を達成した。ゴルトムントは、シッダールタがカマラとの関係において、或いは、ハリー・ハラールがマリーアとの親密な間柄において、到達したのと基本的には同じ個性化のレベルに到達したのである。ゴルトムントは修道院へ帰るとき、確かに多少恥かしさを感じている。なぜなら彼は告白する必要があるからである。けれどもナルチスに別れを告げると、彼はまっすぐにリーゼのもとへ戻る。彼らはお互いの魅力に歓喜し、陶醉して、至福の夜を共に過す。翌日リーゼはゴルトムントに、自分は夫のもとへ帰らねばならないと告げる。彼は悲しんで彼女にさようならを言う。しかし同時に彼は、ナルチスがちょうど今起った状況そのものを予言していたのを思いだす<sup>162</sup>。

リーゼはこのあとに続く数多の征服の第1号にすぎない。けれども彼女も性そのものも、彼の究極の目標を体現するものではない。「私には目標がないと前にあなたに言ったことがあります。私にとっても親切にしてくれたあの女も、私の目標ではありません。私は彼女の所に行きます。しかし彼女のために行くではありません。行かねばならないので、呼ばれているので行くのです。」<sup>163</sup>

彼女との体験は、彼の意識のレベルを大いに高めるのに役立つ。彼の人生で初めて「……世界が彼の前に広々と横たわっていた。彼を受け入れ、励まし、そして辛いめに合わせる用意をして、広々と待ち受けて横たわっていた。彼はもはや世界を窓から見る生徒ではなかった。彼の放浪はもう最後には必ず帰らねばならない遠足ではなかった。この偉大な世界が今や現実になっていた。彼は世界の一部であり、世界の中に彼の運命があった。その空は彼の空であり、その天候は彼の天候だった。」<sup>164</sup>

彼は自然とのあの魔術的な一致をなし遂げたのである。これはアッシジの聖フランシスに対する、ヘッセの非常な賞賛を思いださせるものである。

森の中の最初の夜に、ゴルトムントはさまざまな動物と人々の夢を見る。彼は熊になって、リーゼを愛撫したり抱きしめたりしながら食べてしまう。ユング心理学によれば、リーゼを食べる熊は、アニマのある種の面を見事に内面化しているという点から解釈されるべきであるということは、すでに明らかである。リーゼは熊（ゴルトムント／ヘッセ）の一部になった。官能的な側面はその一切の枝分れした細部を含めて、意識の中に統合されつつある。それでもなおまだ切れていない小さな結び目が一つあるように思われる。なぜならこの夢を見るや否や、ゴルトムントはすぐに目をさまして、この夢の意味は何だろうかと不思議に思う

からである。彼は自分がこの二日間祈りを怠っていたのを思いだすだけである。

筆者にはこの夢と、ゴルトムントがこの夢の解釈に頭をひねることの間には、因果関係があるように思える。彼は今では意識的に自分の新しい役割を受け入れる。しかし祈りの怠たりが、むりやり意識の中へ突きこまれるという事実は、習慣の力から生ずる反応にすぎないものではなくて、依然としてある種の古い世界に対する忠誠を示しているように思われる。

ゴルトムントが自分の人生の目的のより一層の明確さと解明を求めて前進するにつれて、途方もない性愛的な特質が彼から発散してくるよう思われる。女たちは磁石に引かれるように彼に引きつけられる。そしてもちろん異性との出会いはすべて、彼の母の観念を明らかにし、高める機会の追加となる。

旅の途中で出会う農夫の妻も例外ではない。かなり長い間森の中をうろつき回って、宿と食物が必要になったとき、ゴルトムントは文明のしるしに出会う。彼は農家に行き、パンをひとつ下さいと頼む。このエピソードの結末は、農夫の妻が口実をもうけて、その夜あとで干し草畑の指定の場所で彼に会うということである。彼女がやってくるのを待つ間に、ゴルトムントは誘惑と征服がこんなにも明らかにたやすいそのあり得る理由をあれこれ考える。そして場所を指定した例外はあっても、この誘惑が完全に言葉のやりとりなしに行なわれたことに気づく。しかし偶然の出会いそのものは別として、彼らの出会いの重要な側面は彼の態度にある。これは彼が待っていた二番目の女なのである。そして彼の良心はおだやかで平静である。

「それでも、もしかしたら彼の良心は、やはりおだやかではなかったかも知れなかった。しかし彼の良心が時々落ち着かなかったり、負担を感じるの、姦通や快樂のためではなかった。何か別なものであった。それを名指しすることはできなかった。それは犯した罪の感情ではなくて、生れながら持っている罪の感情であった。もしかしたらそれは、神学で原罪と呼ばれるものであったろうか？」<sup>167</sup>

この束の間の至福の時間がすぎると、またこの女は夫のもとへ帰って行く。ゴルトムントは幸福と悲哀を同時に味わいながら、あてのない放浪の旅を続ける。だがこのたびは良心の呵責もなく、祈りや告白をする必要もない。ゴルトムント／ヘッセの性質の官能的な側面は、意識の領域にとって受容できるものになっている。アニマは意識に対して、もはや脅迫することもないし、ディレンマを引き起すこともない。

結婚以外の行為の多くの例のうち、どの場合も自分の還境を捨てて、星空の下で彼と運命を共にしたいと思う女が一人もいないという事実は、ゴルトムントに



とって極めて重要な関心事である。彼女たちは束の間の快樂に満足しているように見える。それからすぐ夫々の家庭と夫の怒りのもとへ帰って行く。おそらくこれらの例におけるアニマの役割は、純粋に觸媒的なものであろう。

貴族の娘、リディアとユーリエとの出会いの場合は、すでに確立されているパターンがほんの少し変更されているだけである。ゴルトムントとリディアとの永続的な美しい関係になったかも知れないものは、彼の激しい官能的な性質のために、まさにその当初から運命は定まっている。彼は少なくとも本当にリディアを愛しているふりをするのであるが、本当に誠実な折々もある。けれどもその貴族を訪問している婦人たちの一人との彼の内密のたわむれは、ただ一人の女性に対する純粋な愛と完全な忠誠とが、ゴルトムントにとっては不可能な状況を提示することを示している。リディアはすでに自分たちの関係の結末に気づいている。彼女はヘルミーネがハリー・ハラーに対してしたのと全く同じように、彼の運命がどうなるかを予言することができる。「あなたはとても美しく、とても明るく見えます。でもあなたの目の中には明るさはありません。あるのは悲しさばかりです。まるであなたの目は、幸福など存在せず、美しいものや愛するものは、みな私たちのそばに長くはいないということを知っているようです。」<sup>168</sup>

まさにリディアが予じめ気づいていた通り、彼らの関係ははかないものである。彼らの場合は他の例のような征服はない。なぜなら父親に見つかってから、ゴルトムントはかなりあわただしく屋敷を去るからである。理想的な関係になったかも知れないものが、今や彼ら二人にとってむなししい結末に終るのである。

このときまではゴルトムントの冒険は、リディアの父とのささやかな意見の相違という例外はあっても、概して非常に肯定的で楽しい体験であった。彼は今度は人生の苦い否定的な面を味わうように強いられる。自己防衛のために、彼は道ずれの浮浪者仲間、ヴィクトルを殺す破目になる。彼は母親たちの顔に表われている出産の苦痛を目撃して、「叫び声をあげている女の表情は、愛の陶醉の瞬間に他の女たちの顔に見た表情とほとんど変らなかつた。」<sup>169</sup>

と述べている。彼はまた文明の庇護を受けずに、酷寒の冬を生きて行こうとすることの厳しさと危険にもさらされる。「二年もたたない中に、彼は故郷を持たない生活の楽しさと苦しみをその奥底まで知った。孤独、自由、森とけものの気配に耳を澄ますこと、さすらいのわがままな生活、厳しい、命にかかわる苦難を知ったのである。」<sup>170</sup>

自らの中に解決されねばならない両極性があるばかりではない、自然そのものの中にも解決を求める無数の両極性があるということを、彼が理解することが不

可欠のことなのである。

自分がこれまで送ってきた自由奔放の生活が、なんら真の成果を産まなかったのを悟って、ゴルトムントは道すがら出会う女たちとの密通と、彼がしばらくの間奪われていた贅沢とを再び楽しみながら、次第に文明に戻って行く。心の大きな重荷をおろす必要にかられても、なぜそうなのかは正確には分らずに、彼は告白に行く。……「もしかすると彼をかりたてていたのは、マリアプロンと彼の敬虔な少年時代との思い出だけであつたろう。」<sup>171</sup>

この秘蹟を受けてから教会を去ろうとしたとき、彼は聖母マリア像の見事な彫刻をじっと見つめる。「……夢と予感の中でもう何度も見ていて、彼がしばしば憧れていた」<sup>172</sup> 像がここにあるという考えが、突然彼の心に浮ぶ。別人になって彼は教会を出る。彼は全く一変した世界を進んで行く。「甘美で聖なる木像を目の前にした瞬間から、ゴルトムントは今まで一度も持たなかったものを、他人が持っているのを見て、非常にしばしば微笑したり、うらやんだりしたものを持ったのである。それは目的だった！彼は目的を持ったのだ。多分これからは彼のばらばらな生活全体は、高い意味と価値を受け取ることになるだろう。」<sup>173</sup>

聖母像の彫刻家、ニクラウス親方に弟子入りを許されてから、ゴルトムントは人生の次の三年間を、シンクレアがそうしたように、自分の心の精神の像を創造し、再現することに捧げる。今度は母エーヴァの像を作ろうとは思わず、その代りに彼は自己の内部に抱き続けてきたイメージ、彼の友ナルチスのイメージを彫刻によって表現しようと努力する。「……高貴な頭は精神によって形づくられ、自製のきいた美しい口と、いくらか悲しげな目とは、精神への奉仕によって引き締められ、気高くなり、やせた肩、長い首、やわらかい上品な手は、精神化の戦いによって魂を吹きこまれている。彼はそのときから、修道院を去ってから、友をこれほどはっきり見たことは一度もなかったし、友の姿をこれほど完全に自分の中に所有したこともついぞなかった。」<sup>174</sup>

この内面のイメージの究極の表現が、言うまでもなく愛される人ヨハネとして表現された見事なナルチスの彫像なのである。

ヘッセの父もまたヨハネスと呼ばれたことも、精神的なもの、即ち、形式の原理を代表するナルチスが、今やゴルトムントの以前の生活の官能的な面に対して優位を占めることも、必ずしも偶然の一致ではない。<sup>175</sup> また「ヨハネス」が、ナルチスが新しい僧院長になったときに名の新しい名前であることに気付くのも、興味深いことである。<sup>176</sup>

ニクラウス親方の娘、リースベトは非常に小さな役割を演じていて、事実上ゴ

ルトムントの内面的な発展に関しては、ほとんど重要ではないけれども、それでもやはり彼女と、彼女より前のゲルトルート、レージー、エレミーナ、エリーザベトとの間に存在する類似点を観察するのは興味深いことである。リースベトもまた痛ましいほど礼儀正しく、よそよそしく、遠く離れていて、ヘッセの初期のいくつかの習作の中の登場人物に与えられた人格そのものである。

芸術家の組合に入るための試験に合格して、ニクラウス親方の気前のいい提携の申出を受けるかどうかの決定に直面したとき、ゴルトムントはその申し出を拒絶する。そしてもう一度自由と無責任の生活に入るために帰って行く。本当は彼の創造力が世界のはかなさについて、必要な理解と承認とを彼に与えることができなかつたのである。彼は最後の選択が一つ、究極の希望が一つあるのに気づく。それは、「悲しげな、残酷な愛の微笑を浮べた、最も年老いてしかも永遠に若い『永遠な母』である。彼は再び彼女の姿をしばしば見た。それは髪に星を飾り、世界の縁に夢見るように腰をおろし、たわむれの手で次々に花を、次々に生命を摘んでは、ゆっくりと底なしの淵に落す巨大な女の姿であった。」<sup>177</sup>

後になって彼は再び自分の芸術を媒介として、自然とのあの魔術的な、完全な合体に到達しようと試みるであろう。彼は存在の永続性を熱望する。しかし自分の作品の中で生き続ける、偉大な芸術家によって享受される程度の永続性以外の保証は彼にはない。

しかしながらその間にペストが地方を襲い、その行手のあらゆるものを荒廃させた。ペストの招いた死と荒廃にひるむどころか、ゴルトムントはそれを、人間をより綿密に、より真剣に吟味する新たな機会だと思う。彼は死に関して何の不安も示さない。どういうわけかこの恐ろしい現象に引かれているようにさえ見える。

「他の人にとっては死は戦士であり、裁判官であり、死刑執行人であり、厳しい父であるかも知れなかったが——彼にとっては死は母であり、恋人であり、その呼び声は愛の誘いであり、その接触は愛の戦慄であった。」<sup>178</sup>

彼がたまたまレーネに出会い、死にかかっている老人たちのもとを去って、自分と暮らすためにくるように説得するのは、この夏の間のことである。彼女とゴルトムントとは、彼らを取り巻く絶えまない死の兆のために、なおさら激しいように思われる至福の数ヶ月を楽しむ。レーネもまたこの恐ろしい病気のために死んでから、彼は再び自分の内面にしまいこまれた無数のイメージを表現するために、仕事場と機会を熱望し始める。これらのイメージの中で絶えまなく繰り返されるのは、母エーヴァのイメージである。ときおりゴルトムントは、始源の母のイメー

ジの新しい洞察と意味に到達した。人間に知られている両極性はすべて彼女の手の内にある。そしてゴルトムントは、確かに十分な数の両極性に身をさらしたのであった。

「愛と快楽とは、人生を真に暖め、価値で満たし得る唯一のものであるように彼には思われた。……生命の母を人は愛とか快楽とか呼ぶことができた。また墓標とも死滅とも呼ぶことができた。母はエーヴァであった。彼女は幸福の源泉であり、死の泉であった。彼女は永遠に産み、永遠に殺した。彼女にあっては愛と残酷は一つであった。彼女の姿をますます長く胸に抱いていればいるほど、その姿は彼にとって秘密に、聖なる象徴になって行った。」<sup>179</sup>

官能の道は、自分が通って行かねばならない道であるということ、彼は以前にもまして確信している。なぜならそのような体験のみが、結局彼を彼の目標に導いてくれるからである。「彼は知っていた、……自分の道が母に、快楽と死に通じているということ。生の父性的な側面、精神と意志とは彼の故郷ではなかった。そこにはナルチスが住んでいた。今初めてゴルトムントは、友の言葉を完全に洞察し、理解した。そして友の中に自分の対極者を見た。」<sup>180</sup>

また続いてゴルトムントは、ヴィクトルが体現しているような浮浪者の生活は、完全な答ではなかったし、現在でもそうでないということを悟る。性の満足だけの生活も同様に答ではない。今や彼は何とかして、精神的なものと同能的なものとの総合がなされねばならないと感じる。そしてこのことは、芸術を媒介として最もよく成し遂げられるように思われる。

「芸術は父の世界と母の世界との、精神と血との結合であった。芸術は最も感覚的なものに始まり、最も抽象的なものに通じることができた。或いは純粋な観念の世界に始まり、最も血なまぐさい肉の中で終ることもできた。真に崇高な芸術作品であり、見事な手品のような……芸術作品は、すべてこのような危険な微笑する二重の顔を、男女両性的なものを、本能的なものと同能的な精神性とを同時に持っていた。だがもし彼が、母エーヴァの像を作ることについて成功するとしたら、それはこの二重の顔を最もよく示すことであろう。」<sup>181</sup>

彼はまた同様に、創作活動によってのみ、内心の葛藤のあの重要な和解を達成することになろうという結論に達した。「芸術の中に、芸術家の存在の中に、ゴルトムントにとってその最も深い対立の和解の可能性があった。或いは彼の本質の分裂にとって、すばらしい、常に新たな比喩の可能性があった。」<sup>182</sup>

こうしてゴルトムントは、彼の宇宙的統一の幻想を有形的に表現しようと試みるために、即ち、母エーヴァの彫刻を創るために、ニクラウス親方の町へ帰って

行く。彼はまたペストの時期の間に蓄えた無数のイメージから脱却せねばならないのである。「自分の心がどんなに多く形象に満たされていることか、こうした死の国の長い放浪によって、自分の心にどんなに多くの形が書きこまれたかを感じて、彼は驚き恐怖を覚えた。ああ、この内心の充実はどんなに緊張させることだろう。静かにそれを思い起し、それを流れださせて、永続する形姿に変えることを、どんなに彼は切望したことだろう。」<sup>183</sup> 彼は猛烈にスケッチをして、過度の内心の緊張を引き起していたこれらの心の中の像を、自分自身から取り除く。彼の思考は、ペストの間に体験した災厄と死から、リーゼヤリディアやレーネなどと共に幸福に満ちた日々の思い出を、紙の上に描き留めるといっづつと楽しい仕事に向う。

原始の母のイメージを、ゴルトムントに造形せざるをえなくしているのは、宇宙におけるさまざまな両極性を何とか和解させ、そうすることで彼自身の内面の葛藤に解決をもたらそうとする彼の切迫感である。「スケッチによって彼は心の中の出口のない、溢れそうな、重苦しい感情を和らげた。」<sup>184</sup> 「彼の特殊な才能の成果は、すべての人々が理解すべき宇宙の統一と個人の統一についての彼の幻想に形を与えるであろう。」<sup>185</sup> ユングは、芸術家によるいかなる始源のイメージにしても、その創造の源泉として、集会的無意識という彼自身の観念に遠回しに言及して、次のように述べている。

「始源のイメージに形を与えることは、言ってみれば、もしそうでなければ彼には閉ざされてしまうであろう生の最も深い源泉を、すべての人が再び見いだすことを可能にする現代の言葉への翻訳である。その点に芸術の社会的重要性がある。芸術は絶え間なく活動して時代の精神を教育している。なぜなら芸術は、時代に最も欠けているあの形式を産み出すからである。芸術家の憧れは、不十分な現代から退いて、時代精神の不十分さと一面性を補償するのに最も適している無意識の中のあの始源のイメージに手をのばすのである。芸術家はそのイメージを把握し、それを最も深い無意識の中から引き上げる仕事をするときに、意識的な価値と関係づけ、それによってそのイメージが彼と同時代の人々によって、彼らの力にに応じて受け入れられ得るまでその形を変える。」<sup>186</sup>

ほんの数日でゴルトムントは、マリーアが持参した一つづりの紙をいっぱいにする。それから田舎の放浪をまた始める用意をする。彼が自分の心を、心の中に入っている多くのイメージから解放しようと大いに熱中するこの時期に、彼は母エーヴァを創造しようという自分の夢に一步接近する。彼は多少スケッチ風ではあるが、少くとも大地の母の「荒い下絵」の肖像を描くことができる。「何度も

彼は細い線で、膝に両手をのせ、顔には憂うつな目の下にかすかな微笑を浮かべて坐っている一人の大きな女の、大地の母の輪郭を描いた。<sup>187</sup>

自分と時間をどうしたらよいのか途方にくれ、また町を去るべきかどうかまだ決心がつかないで、彼は街をうろつき回る。たまたま彼は金髪美人が馬に乗って町を歩いて行くのに出会う。ゴルトムントはただちに決心する。「この女を手に入れることは、高貴な目標であるように彼には思われた。彼女のもとに行く途中でたとえ首を折っても、彼は悪い死に方とは思わなかったであろう。」<sup>188</sup> 彼はこれまで彼女に会ったことさえないけれども、彼女は彼と同類の人間であるというまぎれもない印象を与える。「この金髪の雌ライオンは自分と同類であり、官能と心とが豊かで、あらゆる嵐もすぐに受け入れ、優しく荒々しく、太古の昔から受けついで血の経験によって情熱を知っているということ、彼はただちに感じた。」<sup>189</sup> ゴルトムントはまた自分とアグネスとの、そしてアグネスと自分の胸にしっかりと抱いている母親のイメージとの驚くべき類似に気づく。ほんの数時間後に、彼はアグネスとの会見にこぎつける。彼が彼女に引かれているのと同様に、彼女も彼に引かれているように見える。なぜなら彼女は、邪魔されずに知り合いになる機会を二人に与えてくれるその夜の逢い引きの手筈を、早速ととのえるからである。

アグネスは酒と食事の用意を念入りにしていた。だがゴルトムントはやっていると、早速事に取りかかるために、そのような暇つぶしを無視する。情事の間アグネスは、かなり奇妙な願いを彼の耳にささやく。「ゴルトムント、ああ、あなたは何という魔法使いなのでしょう。美しい金魚さん、私はあなたの子供を産みたい。それよりあなたの手で死にたい。私を飲みほして、愛する人、私を溶かし、私を殺して！」<sup>190</sup> 表面的に見れば、彼女が彼の子供を産みたいと望むのは、十分ノーマルに思われるであろう。なぜならこのようにして彼女という人間のある意味の若返りが生じ、それによって言わば彼女の自己同一性を保持し、彼女にある程度の不滅性を与えるからである。子供を産むということは、自然のあらゆる側面を包みこむマグナ・マターの機能と同じなので、アグネスは恐らく「個性化の原理」と呼ばれる人類のあの状況の解消を熱望しているのである。彼女はゴルトムントも望んでいるあの同じ宇宙の統一を、無意識に熱望しているのである。彼女が口にする死の願いは、恐らくより長い永続性に対する、母なる自然とのより永遠的な結合に対する無意識の欲望である。とにかく、ゴルトムントの女性の分身である彼女は、今では彼が何年もの間抱き続けてきたのと全く同じ考えを、本質的に言葉に表わしているのである。

ゴルトムントは、自分の幸運を一度だけよけいに押し進めることになって、再びアグネスを訪れる。だがどういうわけか見つけられ、縛られ、投獄される。翌朝絞首刑に処せられることになる。自分の考えだけを仲間にして地下牢に坐り、「ちょうどロマン主義の時代の宇宙的ペシミストたちが想像したのと同じように、体験のロマン主義的な追求の結末に直面している」<sup>191</sup> 自分自身を彼は見る。たとえあの魔術的合一を、自然との一致を熱望してはいても、完全な死滅という考えに堪えられずに、ゴルトムントは「母」の慈悲にすがりつく。究極の存在である神にさえ取って代ったのは、実に母の原理なのである。なぜならこの上ない絶望の極みにあって、「ああお母さん、ああお母さん！」<sup>192</sup> と呼ぶからである。だが彼の心の奥底から彼に話しかけるものは、母エーヴァの像ではなく彼自身の母の像である。

「それは彼の考えや芸術家の夢の中の母の姿ではなかった。それは修道院時代から一度も見たことのなかったほど美しく生き生きした彼自身の母の像であった。彼女に自分の歎きを訴え、彼女に向って死なねばならない堪え難い悩みを泣いた。彼女にわが身を委ねた。森と太陽と目と両手を、自分の全存在と生活を、この母の手に返した。」<sup>193</sup>

ハリーに是が非でも必要なときにヘルミーネが出現するように、またクラインに必要なときにテレジーナが出現するように、アニマの像がこの決定的なときに、ゴルトムントの無意識の中から彼をなだめ、慰めるために、今や浮び上がってくるのである。ハリー・ハラーやフリードリヒ・クラインとは異なって、ゴルトムントには死ぬ覚悟もできていないし、死にたい気もない。「だが永遠なるものがあるとなかろうと、そんなものを彼は欲しくはなかった。この不確かなはかない命、この呼吸、自分の皮膚の中でこのように住んでいることなどのほかには何ひとつ望まなかった。生きることよりほかには何ひとつ望まなかった。」<sup>194</sup> 全くそういうことになれば、ゴルトムントはどんな生活でも死ぬよりましと思うことだろう。

そういうわけでゴルトムントは、翌朝僧がやってきたら彼を殺し、その僧の服を着て逃げようと決心する。だが彼が大いに安堵の胸をなでおろしたことは、夜が明けたときやってくるのはナルチスである。ナルチスはゴルトムントの自由と引き換えに、ある種の政治的な譲歩をしたのである。こうして二人は再び一緒になり、マリアブロンに帰って行く。

時はゴルトムントにとって全く情け深いものではなかった。長年にわたる勝手気ままな暮らしがその通行税を取りたてたのである。<sup>195</sup> 帰途彼らはあの貴族の

領地を通過する。だがユーリエも召使いたちも彼が分からない。修道院に帰ると、ゴルトムントはしばらくの間は満足しているが、二年がすぎた頃また落着かなくなってくる。彼は供給の減っていく内面のイメージを補給するために、再び世間へ冒険に出かけなければならないと主張して、もう一度マリアブロンから出発する。

出発少し前のフランチェスカという若い女性との出会いは、ゴルトムントにとって深刻な打撃である。彼はこの美しい若い女を、自分の長い征服のリストに加えようと懸命になって、彼女を魅惑し、彼女の愛を得ようとベストをつくす。

「だが彼女は彼の求愛を拒んだ。そこで初めて彼は、自分が若い女には老いて見えるのに気づいた。」<sup>196</sup> この小旅行の終り頃の彼自身とアグネスとの出会いもまた苦い失望になる。彼女は彼と全く何のかかわりも持とうとしないのである。

こうして母エーヴァがゴルトムントに対して、今や完全な支配力を得たように思われる。アニマの像はもはや彼のこれからも続く発展にとっては必要ではない。この小説全体を通して出会うさまざまな女性像は、すべて激しい性愛的な特質を示した。ゴルトムントが快樂にふけり、そのためにその体験から実際に利益を得たという事実は、母の領域である無意識の中からアニマの原型が受け入れられた十分な証拠である。小説の結末で母エーヴァの像が極めて強烈に出現するのは、アニマの原型と、さらにまたマグナ・マターのレベルまでの進行との見事な同化を示すものである。またシンクレアとデーミアンの場合のように、ナルチスとゴルトムントによって表現された両極性が、互いに見事に補足し合ったことは明らかである。伝えられるところによれば、他方が生き続けることができるように、王子たちの一方が排除されねばならなかった「王様の祭」の状況とは異なって、ヘッセの内面の葛藤の受容と理解とは、「ナルチスとゴルトムント」において、対立するものが相補的なやり方で並んで生きて行くことができるほどに進んだのである。ゴルトムントは、ナルチスが和解して母の世界を完全に受け入れたことを認めることができないので、真の綜合はもたらされてはいない。「だがナルチス、母を持たないのなら、君はどんな風に死ぬつもりか？ 母がなければ愛することはできない。母がなければ死ぬことはできない。」<sup>197</sup> ゴルトムントは彼自身の心の中で、知性の世界を、彼自身の世界、即ち、官能的なものの世界と和解させることができた。そして安らかに死ぬことができるのである。

ゴルトムントの最後の言葉は、著者自身の体験に基づいて解釈されねばならない。もし我々が意識の領域を、父の領域、精神と知性の領域として認めるならば、そしてもし我々が無意識の領域を、母の領域、肉体と官能的なものの領域として



認めるならば、ゴルトムントを通じて語っているヘッセは、「内面への道」の旅の途上での彼自身の体験に対して、かなり短かいけれどもびりっと辛い推薦状を出していると考えすることは、全くなるほどと思わせることのように思われるであろう。ある個人が「善」のみを肯定し、中産階級の道徳と社会的な価値とを守らねばならないものとして支持し、他方でより深い心の奥底から生じてくるノーマルで自然な衝動や刺戟を抑圧しながら、人生を送ること（ナルチス）と、自分の存在のすべての面を受け入れ、自分の内面の法則に従って生き、意識と無意識双方のすべての面を認め、そのようにして希望に満ちて、個人の「完成」にとって非常に重要なあのデリケートなバランスを達成すること（ゴルトムント）とは、全く別のことである。彼らの関係の補足的性質、即ち、ナルチスとゴルトムントとの相互の依存状態の解釈は、次のようになされている。

「ゴルトムントは感覚の人である。……ナルチスは禁欲主義者であり、教会の人であり、言葉の上での知識の人であって、立身して司教になり、彼の世界での権力者になる。彼らの相互的な必要が、最後になって芸術家が傑作を作り、それから死ぬために帰ってくるときに二人を結合させる。ゴルトムントの芸術は、友人ナルチスのコントロールする知性が必要である。ナルチスの言葉は、論証を自己陶酔的な循環論法から守り、神の仕事を完全にするために、『黄金の口』が必要である。」<sup>198</sup>

だが両極性のこの明白な和解さえも、ゴルトムントに母エーヴァの像を作るという究極の目標を実現させるのには役立たない。フーゴー・バルは、母エーヴァの謎めいた表情は、ゴルトムントの死後に残る彫像の中にはないと述べている。「彼女の聖なる秘密は言葉では表現できない。それは人間の手を拒んでいる。息子は母なる女神を予感することしか、……夢の中で見ることしか許されていない。彼女を表現し、彼女の高貴さと豊かさの秘密を漏らすことが、彼に許されているはずがない。」<sup>199</sup> セオドア・ジオルコースキーは、ゴルトムントの母の個人的な像から、マグナ・マターの像へと変形されたこの像は、そのために普遍的な妥当性を獲得して、今や芸術家による表現を許さないとやっている。

「……しかしその像が彼の内部で合体してしまうまでは、それを表現することはもちろん不可能であった。けれどもその像は、ゴルトムント自身が死に瀕して初めて完全なものになる。即ち、この世における彼の生命の完全な消滅のみが、心の中のその像を完成させることができるのである。今や彼は彼女の像を作ることができるであろう。だが彼にはそのための肉体的な力が欠けているのである。ここにヘッセの美学体系の最後のイロニーがある。我々がすでに見てきたように、

芸術によって目に見えるものに、手に触れ得るものにするによって、それをあたかも存在するかのように取り扱うことで理想に奉仕することが、芸術家の責任である。けれどもヘッセは最後の数頁で暗示しているのであるが、究極の神秘はこの芸術家の心の中に納められたままである。ゴルトムントは追求するのに自分の一生を費やした像を、母の像を表現することができない。」<sup>200</sup>

けれどもゴルトムント／ヘッセの自然との、母たちの領域との和解は、………それに含まれる非永続性にも拘らず、………差し当りマグナ・マターの内面の像を芸術的に表現することよりも、はるかに大きな価値があるのである。

## 注

- 155 Ziolkowski, p. 231            156 Ibid. p. 232  
 157 Kurt Leese : Die Mutter als Religiöses Symbol. 1934. pp. 26-27  
 158 Hesse : Narzi $\beta$  und Goldund. Fischer Bücherei. pp. 48-49  
 159 Ibid. p. 63  
 160 F. J. Angelloz : Das Mütterliche und das Väterliche im Werke H. Hesses. Saarbrücken. p. 16  
 161 Hesse : N. u. G. p. 79            162 Ibid. p. 84  
 163 Ibid.                                    164 Ibid. pp. 92-93                    165 Ibid. p. 96  
 166 Ibid. p. 102                            167 Ibid. p. 103                    168 Ibid. p. 121  
 169 Ibid. p. 137                            170 Ibid. p. 149                    171 Ibid. p. 155  
 172 Ibid. p. 156                            173 Ibid. p. 157                    174 Ibid. p. 162  
 175 Th. E. Colby : H. Hesses Attitude Toward Authority. Diss. 1959. p. 9  
 176 Hesse : N. u. G. p. 274            177 Ibid. p. 198                    178 Ibid. p. 234  
 179 Ibid. p. 179                            180 Ibid.                            181 Ibid. p. 180  
 182 Ibid.                                    183 Ibid. p. 239                    184 Ibid. p. 250  
 185 Gladys Schobert : The Meaning of Friendship in H. Hesses Narzi $\beta$  und Goldmud. 1966. p. 106  
 186 C. G. Jung : Contributions to Analytical Psychology. New York. 1962. p. 287  
 187 Hesse : N. u. G. p. 250            188 Ibid. p. 251                    189 Ibid.  
 190 Ibid. p. 256                            191 Boulby, p. 231                    192 Hesse : N.  
 193 Ibid.                                    194 Ibid. p. 270                    u. G. p. 269  
 195 Ibid. p. 299                            196 Ibid. p. 310                    197 Ibid. p. 330  
 198 Ralph Freedman : The Lyrical Novel : Studies in H. Hesse, Andre Gide, and Virginia Woolf. 1963. p. 95  
 199 Ball, p. 262                            200 Ziolkowski, pp. 251-252

本稿は、V. J. Bennett: The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hesse. 1972 中の〈Narziß und Goldmund〉の訳である。本文の英語を内尾一美君が訳し、引用の独語を渡辺信生が訳した。訳文について、同僚の英語科教授柏原啓佐先生に、貴重な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげる次第である。